

## 北中校区にそびえ立っていた「大杉」

「喪失感（そうしつかん）」とは、こういうことを言うのでしょね。大きな大きなものを失って、心にぽっかり穴が空いた感覚があります。私でさえそういう感覚があるのですから、そこに住む方たちの悲しみや寂しさは計り知れません。こここのところの大雨で、大湫地区にある大杉が倒れました。樹齢千二百年から千三百年と言われます。したがって根付いたのは、奈良時代の初めから平安時代の初めあたりと言えます。「日本書紀」「万葉集」が誕生した頃です。

私は大湫地区に住んでいるわけではありませんが、幼い頃から、「大湫と言えば大杉」ということは知っていました。遠足か何かで足を運んだことが出会いだっただけでしょう。初めて大杉に触れたときの感動は、今でも覚えています。

仲間と手を取り合って大杉の周りを囲みました。私の近くにいた仲間だけでは一周回らなかつただけに、大きな声で他の仲間を呼んだことを覚えていきます。

中学生の時には、夏休みの体力づくりとして大湫までランニングをしました。往路はかなりきつい上り坂でしたが、走るのだったら大湫までと迷わず決めました。坂を登り切ると大湫の町が見えてきます。そして、大杉を間近で見ると、さらに走っていきました。大杉を毎日目にして、復路のエネルギーを充電していました。

北中がスタートしてからは、大湫コミュニティに足を運ぶことが多くなりました。そのたびに私は大杉を必ず見てしまいます。そこに立っていることは当然わかっています。しかし、なぜか自然と目が大杉に行ってしまうのです。引きつけられる感覚というのでしょうかね。

私でさえそうなのですから、大湫に住む方たちにとっては、大切な大切な宝物であり、心のよりどころだったと思います。私の悲しみなど、比喩ものにならないことでしょう。これが御神木（ごしんぼく）と言われる所以（ゆえん）でしょう。うね。何も語らない大杉ですが、人の心を引きつける力がありました。

縁あって大湫地区は北中の校区になりました。大杉は二度と同じ場所で人間の生活を見守ることはありませんが、ここに大杉という大きな存在があったことは、北中生として知っておくべきだと私は思います。



（七月十四日 記）